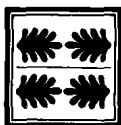


美貌の皇后

日本古典旅行記

亀井勝一郎



講談社文庫

美貌の皇后

亀井勝一郎

昭和51年7月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Ayako Kamei 1976

Printed in Japan

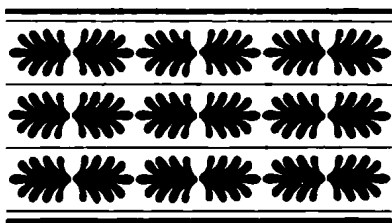
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

美貌の皇后

亀井勝一郎



講談社

目次

美貌の皇后	七
中尊寺	三三
吉野の山	四一
飛鳥路	五七
桂離宮	七〇
佐渡が島	八四
古塔の天女	一〇三
千代田城	一二〇
後記	一三四
「美貌の皇后」とその背景	一三八
年譜	一四八
上原和	

美貌の皇后

(日本古典旅行記)

美貌の皇后

法華寺は大和の国分尼寺である。天平十三年光明皇后の発願されしところで、寺地は藤原不比等の旧宅、平城京の佐保大路にあたる。天平の盛時には、壱田一千町の施入を受くるほどの大伽藍であつた。その後次第に崩壊し、現在の本堂は、慶長年間豊臣氏の命で旧金堂の残木を以て復興されたものと伝えられる。円柱の腐蝕甚しく、荒廃の感は深い。平城宮の廢墟に近く、今はわずか七人の尼僧によつて法燈が擁られるのみ。本尊は光明皇后の御姿を写したと云われる十一面観音である。この二月久しふりで拝観した。

私は「大和古寺風物誌」の中でもかいたが、この観音像についての有名な伝説をもう一度紹介しておきたい。北天竺の乾陀羅国に見生王という王様がいたが、どうかして生身の観音を拝みたく思い、或るとき発願入定して念じた。するとやがて、生身の観音を拝みたくば「大日本国聖武王の正后光明女の形」を拝せよというお告げが下つた。しかし見生王は自ら遠国へ渡ることが出来ないので、再び入定して念ずると、今度は彫刻師を派遣して皇后の姿を彫らせ、それを拝せよ

というお告げがあった。そこで王は、文答師もんたしという名匠を日本へ遣わすことになった。

文答師ははるばる難波津に着いて、そのことを上奏したが容易にゆるされない。ただし皇后の願い、即ちその頃亡くなった母君のために御堂に安置する仏像をつくつてくれるならば、望みをかなえようということになって、文答師はまず皇后の願いのとおり釈迦像を造願した。その代り光明皇后をモデルとして、三軀の観音像をつくることが出来たという。一軀は見生王のため本国にもちかえり、他の二軀はわが国に止めたが、いま法華寺に安置されている十一面観音はその一つであるという伝説である。

興福寺くふじに記載するところで、歴史家はもとより信用しない。しかし古来この像を通して、光明皇后の御影を偲ぶのが仏教徒のならわしとなつていたようである。興福寺に現存する八部衆や十大弟子の作者が、伝えられるごとく文答師一派であつたとすれば、光明皇后がモデルになられたことはあながち、甚しい虚構とも云えない。右の伝説の中で、母君というのは、天平五年亡くなった橘三千代である。皇后がその冥福を祈るため興福寺の西金堂を建立したのは天平六年、時にお年は三十四歳と推定される。聡明仁慈、美貌のほまれ高かつたことは続日本紀の万葉の相聞によつてもうかがわれる。文答師は肖像彫塑にかけては当時一流の芸術家であつた。美貌の皇后とこの天才との邂逅を考えることは、嘘でも大変結構なことではあるまいか。

様々の仏体のなかでも、観音像にはとくに美貌と柔軟性を追究したものが多く、形相から云えば嚴肅な菩薩形をもととするが、これに艶麗な天女形を加味し、云わば東洋のヴィーナスとでもいふべき位置を占めている。上代における観音の姿態の変遷について、私は次のように云つてみ

たことがある。飛鳥仏に宿る祈りは厳しく思索的であり、白鳳仏に宿る祈りは柔軟に音楽的であり、天平仏となればこれに舞踊性が加わる。仏師の芸術的才腕の推移を示すとともに、信仰の微妙に消化されて行く相を語っているのではなからうかと。

上代の貴族が、どういう気持で仏像に對したかを想像するのは困難だが、そこには大体三つの型の信仰がうかがわれる。薬師信仰と地藏信仰と観音信仰である。この中で薬師信仰が上代では首位を占めていた。推古朝から奈良朝にかけて、薬師像の造額が多い。病苦の救済が何よりも望まれたことがわかる。書紀をみれば明らかなように、天然痘と疫病には施す術がなかったのである。地藏信仰は彼岸への導入を主としたもので、時代はやや下り、旅人の指標になるほど庶民性を帯びた信仰となった。様々の如来像もつくられたが、それを拝む心理はおおよそこの二つの型にわけられると云つてよからう。

観音信仰はこの二者と共通の願をもつが、幅は無限にひろく、宗派性をもたぬのが一つの特徴である。あらゆるものに化身して、そのものの身に即して、拔苦与樂するという普門品の教のとおり、また世間の一切音を観ずという名のごとく、森羅万象の裡に遍在する密教的性格をもつ。自由無礙である。自由とはつまり「空」のことだが、「空」における行為を仏教では「遊戲」とよぶ。観音にはこの遊戲性がよくあらわれているのである。さきに舞踊性と云ったのもこの意味で、だから天女の柔軟体に加わり、衣の翻転は自在になる。同時に美的要素が著しく加わり、信仰の対象よりもむしろ、美的悦樂の対象になる傾向をもつ。東洋においては、人体美の理想を観音像に求めたと云えるかもしれない。

こうした傾向は天平期に既にみられるが、次の弘仁から藤原、即ち平安朝になると、明らかに官能に訴えるような「美」自体が仏像にそれとなく具現される。密教の影響は決定的で、宇宙一切の事象を最高仏たる大日如来の化現とみるゆえに、美そのものが信の対象となる。菩薩なるが故に美しいというよりは、美しいが故に菩薩だということになる。この推移は仏像彫刻のみならず信仰上の大きな転機を示すが、天平にそのきざしがみえると云ってよい。文化の爛熟によって、人間の官能と情感が繊細となり、一方で肉感的な美の慾望を充足させつつ、それを通して魂の永遠の憩いの場所をも求めようとする、云わば矛盾せる願望に応えるような仏体があらわれる。

同時に妖しい伝説が生じたのもこの時代である。美に憑かれた信仰者の破戒の伝説が。上代から奈良朝にいたる仏教伝説の多くは、平安朝に成立したものである。十一面観音も、美術史的には弘仁期の作と考証されている。生身の観音を拝みたいなどという贅沢きわまる願望は、平安人のものである。美人の菩薩という妖しい夢を、王朝の貴人は描いたのかもしれない。十一面観音に光明皇后の御姿を偲ぶということのなかには、一種の快樂があつたにちがいない。嚴肅な法悦とは別個の快樂があつたにちがいない。

*

十一面観音は高さ三尺ほどの白檀の立像である。暗い厨子の中にお顔を仰ぐと、切目の澄んだ沈静な眼差と、朱のわずかに残った唇が印象的である。全体の色彩は殆んど剥落し、香煙にすす

けて、やや黒ずんでいる。首から肩へかけての圧縮したような重厚な筋肉、胸はこれと均衡をとるように女体さながらにもり上り、豊満な胴体と、しなやかに左へくねらせた腰が、そこから肉体の連続のように肉体に密着した天衣の流れに融合して行く。親指をちよつとあげて、今まさに蓮華の花の上を歩み出そうとする右の遊び足に、巧みな舞踊性がうかがわれる。

しかしこの像の完成に、最も微妙な役割を果しているのは、長くすらりと伸ばしたその右腕であろう。仏体の美を決定したのは右腕だと云つても過言であるまい。左へくねらせた姿態と実によく調和がとれ、全姿を見事に生かしている。写實的に云えば、右腕は長すぎるが、この場合はこの長さでなければならぬ。

これより短かければ調和は乱れ、これより長ければ奇怪となる。この微妙な確さ、非現実的な長さを判断した仏師の芸は見事である。天衣の端をつまんでいる指も美しい。人さし指と小指が、併行して外側にちよつと出ている、その可憐な感じは、そのまま腕の長さに対して効果的な終止符ともなっている。

写真ではどうしても伝えられない感じがある。とくに顔面がそうで、写真のようにきついところはない。ずつと柔和で聡明の感じが深い。朱の残った唇と、二重のふつくらした額の辺りはあどけなくみえる。三尺足らずの像で、その上黒ずんでいるので、ちよつとインドネシアの美少女と云った感じがある。ここから光明皇后の全姿をしのぶのは無理かもしれない。全姿について云えば、むしろ薬師寺の吉祥天画像や正倉院の鳥毛立女屏風の女性の方が似つかわしいかもしれない。しかしこれら女人の顔の方は困る。天平美女の典型のように云われているが、何もああふく

れてばかりいたわけではあるまい。お顔だけは十一面観音の方がいい。続日本紀の淳仁紀に、皇后崩じた日の記録があるが、「幼にして聡慧、早く声誉を播せり。勝宝感神聖武皇帝儲貳の日、納れて以て妃と為す。時に年十六。衆御を接引して皆その歡を尽す。礼訓に雅閑にして、敦く仏道を崇ぶ。」と記す。少くともこの感じは十一面観音のお顔には伝えられているように思われる。

ところで文答師が皇后をモデルとしたという伝説の裡には、深い仔細があるらしい。仏像は元来信仰の対象である。これが厳密にまもられていたのは飛鳥白鳳期であるが、天平末期あたりからそろそろ怪しくなってきたことは前にもふれたとおりである。鳥仏師の名手たる点は、その嚴格無比な模倣性にある。具体的に云えば、彼のモデルは人体でなくて、伝来の仏体である。我が仏師がいつ頃から人体を詳かに追究したか、記録はないが、伝説がある点でそれを代行している点に留意したい。つまり、仏師が一個の独立せる彫刻家として、芸術意識を信仰の上に置いたか、乃至はこの双方の間に格闘を味ったか、文答師の行為は、そういう問題を示唆した最初のものではないかということである。十一面観音のなまめかしさから、光明皇后の姿態をしのび、更にその姿態に対した文答師の眼と心に思い及ぶわけだが、西洋美術におけるごとく、人体構造の科学的記述や彫刻家としての技法は全く伝わらず、妖しい伝説として残っているところが面白い。この点で、同時代の雰囲気も考えてみる必要があるだろう。

弘仁年間に、仏教伝説を集めた「日本霊異記」という古書があるが、聖武帝時代のことが多い。その中に次のような挿話がのっている。

和泉の国の、さる山寺に美しい一軀の吉祥天女像があった。或るとき優婆塞と名のる僧がこの

寺に住みつき、この吉祥天像を拝んでいるうちに愛慾を生じたというのである。恋着のあまり毎日願をかけ、せめて天女のような美女を授けたまえと念じた。或る夜この僧は、夢の中で天女像と交る。明けて天女像をみれば、像の腰のあたりが淫精に染まっていたという。彼は深く慚愧したが、深く信ずれば、感應せざるはなし、奇異の事なりとあつて、涅槃經にも、多淫の人は画いた女人像にも愛慾を生ずとあることを古書は附加えている。

宗教的にはけしからん伝説だ。この原文は漢文体で、決していい文章とは云えないが、こういう怪しげなことが天平時代には多かつたようだ。続日本紀を通覧すれば、僧俗の頹廢を戒めた詔が少くない。だが他面では万葉相聞にみられるような奔放纖細な情感の養われつつあったのも事実である。天平の仏師がこの間に処して、信心しながらも美に惑溺したことは想像するに難くない。女体の美を求めて、しかも必ず宗教的理念を目ざす観音像とか天女像に造顕しなければならなかつたその制約が、同時に制約内での極度の微妙を追求する結果になったのではあるまいか。そこに創造されたのが、「乳房のない女性」ともいふべき世界に類例のない観音像ではなかつたろうか。

芸術は偉大な誘惑術である。本質的にはいかなる宗教目的にも仕えるものではない。無条件に美しいということが一切であり、観者をして無抵抗状態に導く魔力である。創造者は自ら覚醒し、精密に技をふるいながら、一の「盲目」を創造するものである。この点で、仏教にはキリスト教のごとき非寛容はない。煩惱即菩提の「即」とは、或る意味で狡猾な微笑を含む。夢にあらわれて交つたという吉祥天女もさるもので、類似の伝説は光明皇后にもある。十一面観音は信と

美のあわいの戦慄の所産であつたかもしれない。

*

続日本紀を読むと、罪惡の匂いがある。続日本紀のみならず、歴史とはすべてそういうものかもしれない。飛鳥の推古朝前後は、蘇我家の殺人の歴史である。白鳳の天武朝前後は内乱の歴史である。天平の聖武朝前後は、藤原家と坊主の陰謀の歴史である。そしてその殆んどは血族間の争いで、非命に倒れた皇族重臣の数はおびただしいものがある。或る天皇が崩御されると、今度は自分が天皇になる番だと思ひこむ自薦あるいは他薦の皇子、それをめぐる各氏族の勢力争いが起る。推古帝以来奈良末期まで、女帝の擁立が頻繁に行われた一つの理由は、この間の融和にあつたとも云えよう。奈良朝のとき七帝のうち四帝まで女帝である。天武天皇が壬申の乱後、異腹の諸皇子を召して、一人一人抱きしめながら、「千歳の後に事無からむと欲す。」と誓いを交されたのは、血族相剋の終止を念願されたものであるが、悉く裏切られたことはその後の史に明白である。奈良朝史は一面からみれば、壬申の乱後の各氏族の勢力調整とその破綻の歴史と云つてよい。

「大和古寺風物誌」でも述べたところを、ここでもう一度より詳しく考えてみたい。この時代（前期）における政界の巨頭は、藤原鎌足の息不比等である。蘇我家の専横を覆滅した藤原一家は、時代の下るにつれて蘇我家と同様の行動をとるようになる。天皇家への滲透が始る。不比等には賀茂姫、娍子娘、五百重娘、三千代等の妻があつたが、賀茂姫との間に生れた娘宮子は、文

武帝の妃となり、この間に誕生されたのが後の聖武帝である。また不比等と橘三千代の間に生れたのが安宿媛、即ち後に聖武帝の皇后となられた光明子である。血族結婚と一夫多妻は史を通しての習慣であつて、異とするに足らない。ともあれ不比等は外戚として強固なる地位を得た。この期間における天皇家とは藤原家のことである。

不比等の妻の中で、とくに橘三千代の存在は無視出来ない。三千代ははじめ敏達帝の嫡孫美奴王の妃であつたが、後に宮廷に入つて文武帝幼少時の乳母となり、やがて不比等の妻となつた。藤原家の天皇家滲透に絶大の役割を果たしたのは三千代である。文武帝に宮子を推したのはおそらく彼女であろう。聖武帝幼少の折も哺育し、後に自分の娘光明子を皇后にまで確立した手腕は並並のものでない。政事に容喙したことも少くなかつたと想像される。また彼女の息子は、後に左大臣として政界の中樞を占めた橘諸兄である。天平の背後に隠然たる勢力をふるつた辣腕の女性として著名である。

こうした勢力に対立した今一人の政界巨頭は長屋王であつた。神亀元年聖武帝登極とともに左大臣に任ぜられたが、王は天武帝の皇子高市親王の息で、云わば天武直系である。ところが五年目に殺されてしまった。天平元年に起つた長屋王の変が、いかなる理由に基くか、続日本紀からは詳かにわからない。「私に左道を学び、国家を傾けむと欲す。」と密告するものがあつて、長屋王の私邸は藤原宇合以下の將兵にかこまれ、王は自殺を余儀なくされたのである。その妃（吉備内親王——天武帝嫡孫）と王子達も自ら縊り失せた。これは聖德太子の直系が蘇我家によつて襲殺された悲劇に次ぐ事件である。その二年前、聖武帝と光明子の間に男子誕生、皇太子とされ